

琉大病院 感染対策室 平井 潤先生が「Best Presentation Award（最優秀演題賞）」を受賞

平井 潤先生は、琉球大学医学部附属病院 感染対策室の医員として勤務している傍ら大学院生として琉球大学大学院医学研究科 感染症・呼吸器・消化器内科学講座（第一内科）でも学んでおります。

2015年11月12日（木）～13日（金）に日本、中国、韓国の感染制御の専門家が集まる国際会議、The 14th East Asian Conference on Infection Control and Prevention (EACIC 2015) 第14回東アジア感染制御カンファレンスにおいて、「A case of meningococcal pneumonia promptly diagnosed by MALDI -TOF MS; the utility of MALDI TOF-MS as a tool of infection control」（MALDI-TOF MSによって迅速に診断された髄膜炎菌性肺炎の1例；MALDI-TOF MSは感染対策のツールとしても有用である）という演題で発表を行いました。

現在、感染症診療に関わる臨床微生物検査の3大技術革新と呼ばれている検査には、自動同定・感受性機器、遺伝子解析技術に加え、2015年度より当院の細菌検査室でも利用可能となった「質量分析法（MALDI-TOF MS）」が挙げられます。特に、MALDI-TOF MSは感染症の原因菌がわずか数分で判明する画期的な技術で（検査の原理にはノーベル化学賞を受賞した田中耕一さんが開発した技術を応用）、感染症の急性期の生命予後を向上させる検査法として注目されており、県内では当院と那覇市立病院の2施設で採用されています。

今回は、その質量分析法を感染症治療のみではなく、「感染対策」にも応用できる技術であるということテーマを発表させて頂きました。内容は、肺炎患者の喀痰から髄膜炎菌が検出されたため、患者さんの治療のみではなく、患者さんの接触者に対しても予防的な抗菌薬投与が必要な症例でした。診断が遅れてしまうと接触者も発症し、感染が拡大する恐れがあるため、迅速な対応が求められます（髄膜炎を発症した場合の死亡率は15%、治療が奏効しても後遺症が40%に残る）。しかし、今回のケースでは上述した質量分析法によって迅速に菌名が判明し、接触者に対しても速やかに予防投与を行うことができたため、幸い、二次感染の発症者は1人も認めませんでした。質量分析法が感染対策にも有用な機器であることを経験した症例です。

私の所属する第一内科は国際色豊かな医局で、今回の発表に際しては米国出身の研究者から直接指導を受けることができました。その甲斐もあり、最も優秀な口演演題に対して贈られる、「Best Presentation Award（最優秀演題賞）」を受賞することができました。この場をお借りして、ご指導いただいた先生方を始め、検査を行って頂いた細菌検査室の技師さんや、予防投与薬の手配や接触者の調査などに協力を頂いたICT（Infection Control Team：感染対策チーム）の皆様に深く感謝申し上げます。



（写真左から）平井先生、学会長 尾家先生、成人・がん看護学 大湾先生